

# スピノザにおける「知覚」

## —観念の対象が身体であるとはどういうことか—

吉田健太郎

Kentaro YOSHIDA

社会科教育講座 (哲学)

### 1. スピノザ知覚論の一般的特徴

『エチカ』第2部定理11系<sup>1</sup>

「人間精神 mens humana がこのことあるいはかのことを知覚する percipere」というとき、それは、「神が無限である限りにおいてでなく、神が人間精神の本性 natura によって説明される限りにおいて、あるいは神が人間精神の本質 essentia を構成する限りにおいて、神がこのあるいはかの観念 idea をもつ」というのにほかならない。

定理15証明

人間精神の形相的有 esse formale を構成する観念は身体の観念であり、そしてこの身体はきわめて複雑な組織のきわめて多くの個体 individuum から組織されている。ところが身体を組織するおのおのの個体について必然的に神の中に観念が存する。

これらから、人間精神は自らの身体の構成部分についてすべて知覚しているという、一見驚くべきことが確認される。この点については、定理12において次のように言われていた。

人間精神を構成する観念の対象 objectum の中に起こるすべてのことは、人間精神によって知覚されなければならない。あるいはそのものについて精神の中に必然的に観念があるであろう。言いかえれば、もし人間精神を構成する観念の対象が身体であるならその身体の中には精神によって知覚されないようないかなることも起こりえないであろう。

もちろんこのことは、人間精神が自身の身体・身体の諸部分について、妥当な(十全な)知覚 perceptio adaequata を持っていることを意味しない。スピノザは「人間精神は人間身体を組織する部分の妥当な観念を含んでいない」と定理24ではっきり述べている。また、スピノザのいう身体についての知覚が、通常の意味における身体の「意識」と同一視されることができないことも読み取れる。スピノザの知覚論においては、神が身体の観念として発現する affici ことが、人間精神が知覚することである。そうだとすれば、神が身体

を構成する全ての部分(全ての変状 affectio)の観念に発現するのであれば、人間精神は身体に起こる全ての事柄について知覚していなければならないことになろう。さらにスピノザによれば、このことは身体の観念としてのいわゆる人間精神のみにいえることではなくて、全ての個体(物体)について一般的にいえることである。「全ての個体は程度の差こそあれ精神を有している」(定理13備考)のである。もしそうであるならば、精神は人間のみと与えられている特別な機能ではないということになり、また、精神として機能するために意識(自覚)を伴うことが必ずしも必要とされないということになる。

ところでスピノザによれば、「延長」の様態としての物体と「思惟」の様態としての精神は、同一のもの(=神即自然)が二つの異なる仕方で表現されたものに他ならない。したがって、物体として変状する全ての事柄に対応して観念が存在することになる。人間身体のある状態に対応する観念が人間精神であるように、全ての物体にはそれに対応する観念(=精神)が存在することになり、それゆえ、全ての個物は程度の差こそあれ知覚しているということになる。人間身体のような極めて多くの本性の異なる部分から成り立つ個体は、外部からそれだけ多くの刺激を受けることが可能であるし、また外部に対しても多くの影響を与えることができる。この点において、複雑な部分から組織されている個体は、より単純な他の個体よりも「優れている」といわれることになろう。そしてこの意味においてのみ、人間精神の優越性が語られる。

以上ごく大雑把にスピノザの「知覚」概念を概観する限りでも、同時代の合理主義哲学者デカルトのそれとの違いは一目瞭然であろう。さらに、デカルト哲学の多大な影響下にある現代のわれわれの「知覚」概念とも、かなり異質なものであることが感じ取られたことであろう。以下においては、スピノザの「知覚」概念の独自性を、『エチカ』のキーワードのひとつである「観念」をめぐる議論を検討することによって、できる限り明らかにしていきたい。

### 2. 知覚作用としての観念

スピノザは『エチカ』第2部定理12と13において人間精神を構成する観念の対象は身体であるといってい

た。ところが定理19では次のように言われている。

神は人間精神の本性を構成する限りではなく、きわめて多くの他の観念に変状する限りにおいて人間身体の観念をもつ、あるいは人間身体を認識する *cognoscere*。言いかえるならば人間精神は人間身体を認識しないのである。しかし身体の変状の観念は、人間精神の本性を構成する限りの神の中にある。そしてその結果、人間精神は人間身体そのものを知覚し、しかもそれを現実に *actu* 存在するものとして知覚する。それゆえこの限りにおいてのみ、人間精神は人間身体そのものを知覚する。

人間精神は「身体の変状の観念によって」身体そのものを知覚するのであって、それ以外の仕方では、実在する身体を知覚することはないとスピノザはいう。外的物体についても同様のことが述べられている。

#### 定理26

人間精神は、自分の身体の変状の観念によってでなければ、外部の物体を現実に存在するものとして知覚しない。

やはり「身体の変状の観念によって」という仕方では外的物体の知覚はありえないとされている。スピノザによれば、このことは精神自身の認識についても当てはまる。「精神は、単に身体の変状の観念を知覚する限りにおいてのみ、精神自身を認識する」と定理29系で述べられている。

こうしてみると、スピノザの「知覚」概念を、いわゆるデカルト的観念論の基本構図、すなわち「認識主体としての精神」と「認識対象」のほかに、両者を媒介する第三の心的存在者である「観念」を要請するという三項図式に類似したものとして捉えたいかもしれない。その場合、われわれは事物そのものを素朴実在論者が信じているように認識するのではなく、「観念」という認識主観に備わっている一種のフィルターを通して事物を認識しているのだということになるだろう。「観念」は精神に「直接的」に与えられたものであり、それを「通して」精神の外部にある対象をいわば「間接的」に認識しているのだ、という通念がここから生じてくる。

筆者はスピノザの知覚概念をこのように理解するのは誤りだと考える。それゆえ次に、スピノザの知覚論を「直接的」—「間接的」という枠組みで議論している Bennett の説<sup>2</sup>を批判的に検討することによって、スピノザの「観念」は、いわゆる意識の直接的対象である「表象」や「概念」としてではなく、むしろ、知覚作用そのものとして理解されるべきこと、しかも、知覚作用成立のための条件としての知覚主体なるものの実

在は認められていないこと、を明らかにしていきたい。

#### Bennett の議論 (1)

スピノザによれば、私の精神は私の身体についての観念である。このことを Bennett は次のように模式化して表している<sup>3</sup>。いま  $x$  が私の身体であるならば、 $x$  についての観念を意味する  $I(x)$  は私の精神ということになる。より現代風にいうならば、 $I(y)$  が存在するとき、 $y$  は脳の出来事といて良いかもしれない。例えば、私が今日の天気について悲観的に考えているとき、それに対応する身体内部の出来事が存在するということである。われわれは通常「天気についての私の思考」が、ある脳の出来事(状態)を表現しているとは見なさないが、スピノザが「私の身体に起こることの全ては私の精神によって知覚されねばならない」というとき、まさに精神は身体の出来事を文字通り「表現」していると考えているようである。このように観念が私の身体を表現すると文字通り解釈されるとき、観念と身体との間を「第一の表現(表象)関係」と Bennett は規定している。

しかしいうまでもなく、観念は私の身体の状態のみを表示するのではない。身体の外部についても私は何ごとか知っているはずである。それゆえ、スピノザは観念と物理的なものとの間の「第二の表現(表象)関係」についても言及していると Bennett はいう。つまり、 $I(x)$  を単に  $x$  の *mental counterpart* としてだけではなく、 $x$  以外の何らかのものについての表現でもあると捉えるわけである。したがって Bennett によれば、 $I(x)$  は「直接的」には  $x$  の表現であるが、「間接的」には  $x$  以外の他のものについての表現であるということになる。よりスピノザに即していうならば、もし  $y$  が私の身体の状態  $x$  を引き起こすのであれば、 $I(x)$  すなわち  $x$  を直接的に表現しており  $y$  を間接的に表現している観念は、 $x$  の本性と同時に  $y$  の本性を含んでいる。つまり、私が  $x$  の観念を持つということは、私が  $x$  と  $y$  の両方を知覚するということである。

Bennett は、われわれは自分の身体そのものの出来事について「直接的」に知覚するのに対し、身体を刺激する外部の物体については「間接的」にしか知覚されないと考えているようである。また、「直接的」な知覚をいわゆるスピノザの平行論と関係付けて、身体的出来事との間に一対一対応の写像関係にあるものと規定し、そのような一対一対応を含まない「間接的」な知覚から区別しているようである。Bennett のこうした区別は、スピノザが「身体の変状によって」外的物体を知覚するという場合に、なるほど容易に連想されるものものかもしれない。しかしこのスピノザの文言は、身体の変状の観念がいわゆる感覚与件 *sense data* や前判断的印象に類したものと同一視されない限りにおいてのみ、正しく理解されると筆者は

考える。さらにまた、変状の観念を通して(間接的に)外的対象を表象すると考えることも、スピノザの「知覚」論は禁じているのではないかと筆者は考える。まさに身体の変状の観念を持つことそのことが、外的事物を(自分の身体との相対関係において)表象することなのである。

ここでまず、スピノザにおいて「身体の変状の観念を持つ」ことと、「知覚する」こととは区別されていないことに留意しなければならない。例えば、定理17証明では次のように言われている(括弧内は筆者による補足)。

人間身体がそのような仕方(=外部の物体の本性を含む仕方)で刺激されている間は、人間精神は身体はこの刺激を観想する *contemplari* であろう。言いかえれば、精神は現実に存在する刺激状態について外部の物体の本性を含む観念を、言いかえれば、外部の物体の本性の存在あるいは現在を排除せずにかえてこれを定立する観念を有するであろう。

身体の変状の観念は、人間身体の本性「と同時に」外部の物体の本性を含んでおり、「外部の物体を現実に存在するものとして」表象する。観念そのものが、判断を内包する知覚から区別されて、前判断の様相として理解されることもあるが、スピノザはそのようには考えない。「観念が観念である限りにおいて、肯定ないし否定を含む」ことは、定理49の中で再三注意されているところである。観念は「画板上の絵のように無言のもの *pictura in tabula muta*」ではなく、「認識様態すなわち認識作用そのもの」であるともいわれている。したがって、スピノザのいう「身体の変状の観念」を、デカルトが『省察』『反論と答弁』の第六答弁で言及している感覚の第二段階に相当するものと解釈することはできないだろう。デカルトによれば、「このように(=外的対象によって)感触された *affectus* 身体的器官とそれ(=精神)が合一しているということより、精神に直接に反響してくる *resultare* ところのすべてのもの」、すなわち身体内部的感覚は第二段階の感覚に属し、「われわれの外にある事物について」の判断を包含する第三段階の感覚から、すなわちいわゆる「知覚」から区別されていた<sup>4</sup>。しかるに、スピノザにおいて「身体の変状の観念」を持つとは、まさに、外部物体についての存在判断を形成することである。身体の変状の観念をいわば素材にして、知性がそこから存在判断を形成するのではない。したがって、身体の変状の観念「によって *per*」外部物体が知覚されるというとき、「よって」という前置詞はデカルト的に解釈されてはならない。

われわれは身体的変状の観念と質料的に区別された外的物体の観念を持つわけではない。私が身体の変状

の観念を持つという場合、私はまさに外的物体の本性と自分自身の身体の本性とを、同時に混在した形で知覚するわけである。そしてこのことは、外的物体の知覚とは、外的物体が私の身体との相対的關係において現出してくることに他ならないことを表している。例えば、私が太陽を見ているとき、私が現に存在すると感じる(判断している)太陽は10円玉くらいの大きさでしかないだろうが、この太陽についての知覚がまさに私の持つ「身体の変状の観念」であると解釈されるべきであろう。したがって Bennett の定式でいえば、 $I(x)$  のとき、私は太陽によって刺激された私の身体の状態  $x$  と外的物体としての太陽  $y$  の両方を知覚するとしても、私のうちでそれらが区別された表象として別々に知覚されているわけではないことに注意したい。そうであるならば、Bennett の「直接的」「間接的」という区別は、こと人間精神の現実的存在を構成する「最初」(定理11)の個物の観念に関する限り、実質的に意味を持たないのではないかと思われる。

## Bennett の議論 (2)

Bennett は、私が持つ観念は私の身体の観念であるのみならず、他者についての観念でもありうることから、私の身体についての「直接的」観念は、他者の身体についての「間接的」観念でもあるとしている<sup>5</sup>。

実際スピノザは定理17備考のなかで、ペテロ自身の精神の本性を構成する「ペテロの観念」と、他の人物例えばパウロのなかにある「ペテロの観念」との間にある差異について述べている。前者はペテロ自身の身体の本質を「直接的」に説明し、ペテロの存在する間だけしか存在を含まない。それに対し、後者の観念はペテロの本性よりもパウロの身体の状態をより多く示している。

ところで、ここでスピノザがいかなる意味において「直接的」という語を使用しているのか、少し曖昧である。ペテロは自分自身の身体について、常に自身の身体的変状によって知覚しているのに対して、パウロはペテロを実際に見たときあるいは記憶のうちに存続している場合に限り、ペテロの身体について知覚する。ということは、(ペテロの精神の本性を構成する)ペテロの観念とペテロの身体との表象関係にはいわば内的必然性が存在するのに対して、(パウロが持つ)ペテロの観念とパウロの身体との間には単に偶然的な表象関係しか存在しない、という意味で「直接的」という語を使用しているのであろうか。

いずれにしても、ペテロ自身がもちろん誰よりも自分自身の身体について知覚していることは疑う余地はない。これは、ペテロの精神の本質を構成する形相が、ペテロの身体の観念であることを意味しているにすぎない。もっともペテロにしても、自分自身の身体を「身体の変状の観念」として知覚せざるを得ない以上、定

理19でもいわれているように、ペテロ自身の身体について妥当な観念をもつわけではない。常に他の事物から影響を受けた形で、すなわち身体の変状という形式において、自身の身体の状態を知覚しているというのが正確ない方であろう。

ここで、ペテロ自身、自身の身体を知覚するのに他の人物の現存を必要としないのに対して、ペテロ以外の人物、例えばパウロがペテロの身体を知覚する場合にはそうではない、という意味で「直接的」という語が使用されていると解されるのであれば問題はない。ところが、「直接的」あるいは「間接的」という語が次のように解釈されるならば、われわれはスピノザの知覚論を誤解することになるだろう。すなわち、われわれは自分自身の身体の変状についてのみ直接的に知覚しているのであって、その他のものに関しては、直接的に知覚された身体の変状の観念からいわば類推・構成されるという形によって間接的にのみ認識可能である、と。

そもそも、スピノザが「身体の変状の観念をもつ」というとき、精神が表示するものは、身体の内部に起こる出来事についての何らかの情報だけとは限らない。身体の変状の観念は、外部の物体について何ら表象し得ないと考える必要はない。それどころか、われわれが外部の物体について知覚するというそのことが、まさに身体の変状の観念をもつことに他ならないのである。身体の変状の観念をもつことが、外部の物体をわれわれに現在するものとして把握させることである限り、スピノザにおいて「身体の変状の観念」と物体の知覚との間に、何らかの認識論的ギャップを見ることはできない。

スピノザによれば、私の精神の本質を構成する観念の対象は身体である。しかしこのスピノザの文言における「対象」は、通常の意味での「観念によって表現される場所のもの」と同義ではない。神が人間身体として様態化するのに対応して、思惟様態としての精神が、同一事物の異なった表現様式として現出する。観念の「対象」としての身体は、それゆえ、観念の physical counterpart という意味での「対象」であって、いわゆる観念の志向的对象という意味で理解されてはならない。「精神とは身体の観念である」とは、身体で起こっている事柄が「思惟の様態」(＝観念)という別の表現様式で存在することを意味している。しかしこのことは、その表現内容が自身の身体そのものに限定されていることを何ら意味しない。観念(＝精神)の「対象」が身体であることと、観念の表現しているものが外部の物体であることとは、スピノザにおいて何ら矛盾することはない。したがって、私が「身体の変状の観念を持つ」とは、外部の物体に関しては、自身の身体との相関関係において把握された物体について知覚することであり、身体自身に関しては、外部の

物体との相互関係のうちで把握された自身の身体について知覚すること、にはほかならない。いずれの場合も、身体の変状についてのいわば生理学的情報の知覚について言われているのではもちろんなく、われわれが外部の物体あるいは自身の身体を「表象的有 entia imaginationis」という仕方(＝身体の変状の観念)、現前するものとして、その意味ではいわば意識に直接的に与えられているものとして認識しているという現象を言い表しているにすぎない。

### 3. スピノザの平行論と身体の「観念」としての精神

一般に、精神が何らかのものを表象することはいかにして生じるのか(可能であるか)という問題は、伝統的に、表象されているものは何かという問題、すなわち思惟あるいは観念の「対象」は何であるのかという問題とは別の問題であるとされてきた。後者の問題については、ある意味においてそれは問題にならない、つまり理論とは独立した自明のものと考えられる。というのも、通常、私の思惟の対象はまさに私が考えているところのものであり、私はそれが何であるかを知っている(意識している)からである<sup>6</sup>。

ところが、スピノザにおいてはそう単純ではないように思われるのである。スピノザの「観念」という用語については、これまでその曖昧さが指摘されてきた。その混乱の起源が、観念の「対象」が身体であるという、かのスピノザの定式にあるのは間違いあるまい。例えば、「ペテロの観念」は、ペテロの脳や神経組織に対応する心的複合、すなわちペテロの精神を表示するのか、それとも、例えばパウロがペテロについて考える際に存在する心的部分、すなわちパウロのペテロに関するいわゆる観念を表示しているのか、曖昧であるという指摘がなされている<sup>7</sup>。つまり、スピノザによれば「観念」とは、その観念の対象(「観念されたもの」)が人間身体ないし人間身体の諸様態であるものとして、定義されているようなのだが、通常のわれわれの用法にしたがえば、「観念」はその対象が人間身体以外の外的物体でもありうる(むしろその方が多い)と理解されているのではないか、という素朴な疑問が根底にあるといえる。「精神を構成する観念の対象は現に存在する身体であって、それ以外のものではありえない」(定理13)というスピノザの定式は、文字通り受け取るならば、人間精神は自身の身体についてしか知りえず、それ以外については不可知なのかという素朴な疑問を起しかねない。あるいはまた、スピノザが『エチカ』第2部において外的物体についての表象理論なるものを展開しているとすれば、それは「観念の対象は身体である」という基本スタンスといかにして整合的に語るができるのか、という疑問も出てこよう。問題は、スピノザが「対象」という用語をいかなる

意味において用いているのか、という点に収斂されてくると思われる。それゆえ次に、スピノザのいわゆる「平行論」との関係で「対象」について論ずることにしたい。

身体の状態（物質粒子の運動）として表現されるものと同一のものが、別の仕方、すなわち観念として表現される（様態化される）ということ、これがスピノザのいわゆる平行論であった。したがって事物の認識・知覚を、通常のように、対象としての外的物体が精神に対して何らかの仕方、因果的に作用すること、つまり外的物体の知覚は外的物体を原因として持つという仕方によって説明することが不可能となる。観念とその対象との間に何らかの因果関係を見ること自体が否定されているのである。

スピノザにとって「精神が知覚すること」と「身体がある特定の状態にあること」とは、全く時間的に同時の出来事である。同一の事態が全く異なる様式によって表現されているだけのことである。したがって、身体の状態・刺激がいかんしてある特定の感覚・知覚を引き起こすのかという、いわゆる心身問題に典型的な難問からはとりあえず免除されている。（もちろん、異なる属性間レベルでの対応をどのように理解すればよいのか、「延長」と「思惟」とが同一物の異なる二つの表現形式であるとなぜいえるのか、その根拠はどこにあるのか、という解釈をめぐって問題は積み残されたままであるといえるかもしれない。最終的には、スピノザの形而上学的直観に帰着せざるを得ないのかもしれない。）

スピノザが精神は「身体の観念」であるというときも、それゆえ、「（大抵の人々が主張するように）対象があってあとからこれを認識する」（『エチカ』第1部定理17備考）と理解しているわけではない。スピノザは観念を精神実体の様態として考えることを否定する。あくまで、身体の状態（物体の運動）という様式で表現されているものが、同時に観念という様式で表現されており、両者の間に一対一対応が存在していることを言っているにすぎない。

Radnerの表現を借りるならば、「観念」とその「対象」とは、同一事物の objective reality と formal reality の関係として理解されるといってよいかもしれない<sup>8</sup>。それゆえまた Radnerの指摘するとおり、スピノザにおいては「観念の対象」と「観念が表象するもの」とは厳密に区別されねばならない<sup>9</sup>。観念の対象は、人間精神の場合人間身体でしかないが、人間精神が認識するものは人間身体に限定されることはない。一方で身体の変状という仕方、表現される場所のものが、他方で思惟の様態（＝観念）という形式で表現されるとき、この思惟の様態すなわち観念を持つことが事物の知覚に他ならない。

いま、観念の対象は人間精神の場合身体でしかあり

えないと述べたが、これに対して、『エチカ』において観念の「対象」は身体に限定されているわけではないという反論が出されるかもしれない。なるほど、定理21証明では次のように言われている。

精神が身体と合一していることを、われわれは身体が精神の対象であることから明らかにした。したがってこれと同じ理由により、精神の観念も、精神自身が身体と合一しているのと同様の仕方、その対象と、言いかえるならば精神自身と合一していなければならない。

精神の観念すなわち「観念の観念」が問題となるときには、観念の対象は身体ではなくて精神であるといわれているのではないか、というわけであろう。しかしこの場合でも、「観念」とその「対象」の関係が、同一事物の objective reality と formal reality の関係として理解されているという点是不変である。定理21備考では、精神と身体が同一個体であるのと同様に、「精神の観念と精神ともまた同一事物である」といわれている。ここでは formal reality としてみられた観念（＝精神）が、思惟様態という様式で表現されることが「観念の観念」なのである。このようなことを考慮に入れるならば、厳密には、「精神（＝観念）の対象は身体である」とスピノザが『エチカ』第2部でいうとき、それは「自然の共通の秩序 ordo communis naturae」にしたがう限りでのわれわれの知覚が問題となっている場合に限定されている、というべきなのだろう。おそらくスピノザ自身、そのような限定は当然のこととして論を進めていたのである。したがって、目下第2部における「知覚」を問題としている筆者としても、スピノザにおいて観念の「対象」は身体であるということを、文字通りそのまま取り上げておきたい。

ともあれ、スピノザが精神を「身体の観念」と規定するとき、これまで多くの論者たちが「観念の対象」と「観念によって表現されるもの」との差異をめぐってさまざまな整合的解釈を試みてきたわけであるが、そしてその場合の論点は何はさておき「身体の観念」としての精神が、身体以外の外部の対象について認識することをいかにして説明し得るかというものであったが、筆者としては単純に次のように考えればよいのではないかと思う。すなわち、観念の「対象」を、私の思惟に対応する身体の状態、すなわち延長属性の様態として見られた事物、スピノザの平行論においていわゆる「観念」に対応する物理的状态、という意味に限定して理解するならば、そして「観念の対象」と「観念が表象するところのもの」を区別するならば、「人間精神（＝観念）の対象は身体でしかありえない」というスピノザの文言を、まさに文字通りに受け取って構わないのである。そしてこの観念の対象が身体でしか

ないということが、スピノザの他の主張、すなわち「人間精神は神の一部であること」(定理11系)や「人間精神が自身の身体、外的物体、自分自身(=精神)について妥当な認識をもつことができないこと」(定理29系)といわばオーバーラップしてくるのである。

スピノザ的平行論においては、「観念」とその counterpart である「対象」とはそもそも類似性・共通点を持たないのであるから、精神の形相的有を構成する観念の「対象」が身体であるからといって、観念は自身の身体それ自体のメカニズムを、いわば表現内容として写し出している必要はない。「観念」は延長属性とは異なる独自の表現様式によって神(=自然)を表現しているのであるから、「観念」の表現する内容が、延長属性の一樣態として限定される身体といかに類似するか、いかに正確に写し出しているか、という問題設定自体が無意味である。私が太陽を見ているときに持つ観念は、私の身体の状態を「対象」とするのではあっても、その知覚内容は、当然のことながら、私が現に太陽について持つ知覚以外のものではない。「対象」としての身体の変状をいくら分析しても、私が持つ光の感覚・知覚、明るさや温かさの感覚・知覚は、それ自体形相的存在として空間的・場所的に存在するわけではない。(もちろんここでデカルト的心身二元論のイメージをスピノザが共有していると取られてはならない。)

さらにスピノザ的平行論における「観念」と「対象」の独特な用語法にしたがうならば、定理12でいわれていたこと、すなわち「人間精神は人間身体のうちに起こるすべてのことを知覚していなければならない」ということ、も理解可能である。実のところこの文言は、人間精神の「対象」は身体であることを言いかえただけにすぎない。身体で起こっている事柄と同一のことを、「思惟の様態」(=観念)という仕方で表現することが知覚作用であった。それゆえわれわれが太陽を知覚するとき、私の持つ太陽の観念(=表象)に対応して、太陽に刺激されることである特定の状態に変状している身体が physical counterpart として存在する。言いかえるならば、「対象」としての身体がある特定の状態に変状していること、そのことがまさにわれわれが太陽の知覚を持つことに等しいわけである。このように理解するならば、定理12の文言は何ら Curley のいうようにパラドクスと呼ばれる必要もないと思われる<sup>10</sup>。

結局のところ、身体の変状の観念が、いかにして身体以外のものを表現し得るのかという問題設定そのものは、少なくともスピノザのうちでは問題となり得なかったとしかいえないだろう。

#### 4. 観念の非妥当性

スピノザは定理32と36において「すべての観念は、

神に関する限り、真かつ妥当である」といっているが、他方、定理28と36において「観念は、人間精神に関する限りにおいて、非妥当でありうる」という。この二つのスピノザの文言に関して、かつて Barker は次のような疑問を提出していた。すなわち、同じ一つの観念が、神に関しては妥当であり、人間精神に関しては非妥当であるということが果たしてありえるのか<sup>11</sup>。ここでの Barker のポイントは「同じ一つの観念」にある。人間精神において非妥当な観念が、神に関して妥当な観念となるには、観念の内容において何らかの変更がなければならないはずである。そうだとしたら、両者はそもそも全く別の観念といわれるべきであり、「同じ一つの観念」がコンテキストに応じて妥当であったり非妥当であったりするとは理解不可能ではないか。

この Barker が提出した問題に対して、Radner は次のように答えている。なるほど、「同じ一つの観念」が妥当であったり、非妥当であったりすることはありえないが、Xについて神がもつ観念が妥当であるのに対して、Xについて人間精神がもつ観念が非妥当であるということは理解可能である。というのも、神がXについて表現する観念と、人間精神がXについて表現する観念は、同一ではありえないからである。それゆえ、Barker は観念と観念が表現する事物とを一对一対応に限定して関係付けており、別の観念が同じ一つの事物を表現しており、一方が妥当な観念で他方が非妥当な観念であるという状況を正当に理解することができなかったのではないかと Radner は分析している<sup>12</sup>。

同じ問題について Mark も基本的には Radner と同種の解答を提出している。Mark も Barker の問題設定そのものに異議を唱える。つまり、神と人間精神が同じXについて表現しているからといって、これら二つの観念が全く同一であることは帰結しない。妥当な観念は非妥当な観念より、より多くのものを含む観念であるからである<sup>13</sup>。

ところで、Radner や Mark の議論を筆者なりに敷衍してみると次のようになる。人間精神のうちの非妥当な観念は「いわば前提のない結論のようなもの」であると定理28で言われていた。つまり、人間精神が持つ非妥当な観念は、全体のコンテキストから離されてそれ一つだけ孤立した状態にある。たとえていうなら、ジグソーパズルの1ピースのようなものである。他のピースとともに結合されることによって初めて自らのポジションを持つという意味で、それ単独では正当な価値をもたない。スピノザによれば、ある観念が妥当であるということは、その観念に本性上先立つすべての観念を自身のうちに含んでいるということである。神の無限知性の中にある観念Aは、それに因果的・論理的に先立つすべての観念とともにあるから妥当なの

である。これに対して、ある限られたパースペクティブからの表現内容しかもたない人間精神は、「前提のない結論」のごときものであり、事物を部分的にしか表現していない。以上のことからいえることは、神の認識の仕方は、人間精神の認識の仕方と根本的に異なるということである。神の場合は、あるものを認識する際、常にその因果的・論理的経歴や由来を含む形で認識するのに対して、人間精神の場合は、「身体」の観念という特定のパースペクティブからの認識に限定されている。

ところで、スピノザが、一方ではすべての観念は神に関する限り妥当であるといい、他方で人間精神に関する限りでは非妥当でありうるという場合、そこで論じられていることは、神と人間精神の、認識における表現内容の相違すなわち認識の仕方の根本的差異を明確にすることであったと、Radner や Mark が主張しているとすれば、その主張を筆者は否定することはない。しかしながら、神のうちではすべての観念が妥当であるとスピノザがいうとき、筆者は Radner や Mark の議論では触れられることのなかった別の論点も、スピノザの中で問題となっていたのではないかと考える。

スピノザによれば人間精神は神の無限精神の一部であるから、「もし私が何らかのものについて非妥当な観念をもつとすれば、そのときには、その非妥当な観念は神の知性の中においても生じる」ように思われるかもしれない。つまり、私にとって非妥当にしか認識されない事物に関して、神は、私の持つ非妥当な観念とともに他のすべての観念を同時にもつことによって、妥当に認識するようになると解釈することが可能かもしれない。神においては、妥当な観念が形成されるために、私の持つ非妥当な観念が他の多くの観念と結合されることになるとスピノザは理解しているように思われるかもしれない。このことを Mark は、「私の持つ観念は、神のうちにあっても、非妥当であり、神が持つ観念は私の持つ観念を含んではいるが妥当である」と言い表している<sup>14</sup>。

しかしここで問題が浮上してくる。というのも、もし Mark のいうように、神は他の観念とともに、私の持つ非妥当な観念をそのまま含んでおり、それゆえ神のうちでも非妥当な観念が存することとなれば、「すべての観念は神に関して真かつ妥当である」という大前提と矛盾してくるのではないかと思われるからである。このスピノザの大前提となる命題を保持する限り、私のうちの非妥当な観念は、神においては妥当なものではなければならないように思われてくる。そうだとすれば、なんと Barker の疑問が再度浮上してくるのではないか。私のうちのある観念は、それが私の精神という有限な精神に関係付けられる限り、非妥当でありうるが、その同じ観念が神の無限精神に関係付けられ

る限り、妥当であるということになる。このことは、まさに、「同じ一つの観念」がコンテキストに応じて妥当であったり非妥当であったりするのではないか。この問題にどのように答えるべきだろうか。

Radner や Mark は、包摂される観念の量の相違として、認識における神と人間精神の差異を規定しているように見える。例えば、Xについて私はAという観念しか持たないのに対して、神はAだけではなく他の多くの観念B・C・D・E…を持つ。そして、神の持つ認識内容の部分集合として、私の持つ観念Aが存在する。ところがこのように考えるならば、観念Aは私のうちでも神のうちでも、同一の存在価値を持つものとして、つまり相互に交換可能なものとして理解されていることになる。だからこそ Mark は、私の持つ非妥当な観念が「神のうちでも」また非妥当であるといえたわけである。

しかし、そもそも観念の妥当・非妥当は関係概念であって、ある一つの観念それ自体に内在的な性格ではないことが留意されるべきである。一つの観念それ自体に、固有の観念内容がいわばアプリオリに定まっているわけではない。スピノザにおいては、とりわけ個物の観念は、常に他との関係において相対的に、その意味内容（表象内容）が規定される。したがって私の持つ観念Aと、神の知性の中に包摂される観念Aとでは、その規定内容が全く違うといってもよいだろう。観念Aが、相関するコンテキストなしに全く単独の相で現出するときは、まさに「前提のない結論」のごときであったものが、他の多くの観念との相互関係の網の目の中に置かれることによって、初めて本来あるべき意味内容を持つにいたる。いかなる観念も、それ自身によって自己規定され、自己充足するわけではなく、常に他のものから規定されることによって意味を与えられるというわけである。このように考えれば、なぜスピノザが、いかなる観念も神のうちでは非妥当でありえない、ということができたのか整合的に理解可能であると思う。

## 5. スピノザ知覚論の意図するところ

Radnerによれば、スピノザの表象理論(知覚論)は、デカルトの理論に含まれる難点を克服するという動機のもとに企図されたという<sup>15</sup>。思惟属性の様態としての精神が、全く異なる延長属性の様態である物体を、いかにして認識することができるのだろうか。精神(心)が自分とは異なる外部の物体を表象することはいかにして可能であるのか。思惟と延長との間にいかなる類似性をも見出せない以上、デカルトのいうような、観念が対象と何らかの類似性を持つこと(観念はいわば物の像である)によって対象を表象するという説明方式は原理上閉ざされることとなる。また、デカルトの二元論的表象理論によれば、真理は観念と対象

との一致ということになるが、とりわけ物的対象についての認識において、精神はいかにして自分とは全く異なる対象との一致・対応を語るができるのであろうか。観念はあくまで思惟の様態であり、その観念の対象が思惟様態とは実在的に区別される延長様態であるとするれば、両者の一致ということとは文字通り不可能であり矛盾することではないのか。いかなる意味で両者の一致・対応が語られるのか。そもそも、思惟の様態である観念が自分以外のものを「表象する」ことを、デカルト流の二元論は、整合的に説明することができないと思われる。これらの疑問は、いわゆる心身問題とも繋がっている。デカルト的二元論に準拠する限り、精神と身体との因果的相互関係を説明するのに困難が生ずるのである。

Radner によれば、こうしたデカルト二元論に基づく知覚論の問題点を克服するために、スピノザは自らのオリジナルな知覚論を打ち立てたのだというわけである。ところで問題は、Radner のいうように、人間精神による物体知覚がいかにして説明可能なのかについての、説得的でデカルト理論にとって変わる理論の提示がスピノザの本来的企図であったのかどうか、ということである。筆者としては、スピノザが『エチカ』第2部で展開した議論は、派生的にはいわゆる心身問題という論点に関わるとしても、本質的には別の問題意識の下に展開されていたと考える<sup>16</sup>。

スピノザは、物体についての知覚がいかにして成立するか、精神が物体を「知る」ことはいかにして可能か、について新たな理論を提示するというよりはむしろ、「知覚」「認識」「知る」といったことについて従来とは全く異なる定義を与えようとしていたのではないだろうか。「知覚」についての新しい理論を提示するという場合、まず考えられるのは、知覚のプロセス・知覚のメカニズムについて新しい理論を提示するというものである。例えばアリストテレス流の質料・形相に基づく知覚論からデカルト流の心身二元論に基づく知覚論への移行という場合がそれであろう。この場合はしかし、知覚は、物体（身体）から精神への何らかの運動を伴う状態変化として理解されているという点で、知覚そのものの通念的理解には変化がない。つまり、精神における知覚は、身体の物理的状態変化の末端に、いわばそれに付加されるという形で、位置するものとして理解されているのである。（この点に関しては、現代の心身問題をめぐる議論においても基本的に変化してないと思われる。）これに対して、そもそも「知覚」とは何であるのか、どのような行為・現象であるのかを、従来の身体から精神への移行というパラダイムを批判するという仕方では、根本的に問はず場合が考えられるだろう。スピノザの企図したもの、もちろん後者であると筆者は考える。

### スピノザの新たな知覚概念

1. 思考する主体（＝自我）が、外部の物体（対象）について、観念を獲得するという図式での知覚の説明方式、すなわち、思惟実体—観念—対象という三項形式での説明方式を拒否するという。とりわけ強調されるべきことは、精神＝思惟実体・主体という精神の実体性・主体性が否定されていることであろう。知覚が成立するために、いわゆる知覚主体なる思惟実体の存在が要請される必要はないのである。スピノザにおいては、精神は観念そのものであって、両者の間に存在論的ギャップは存在しないのである。
2. 知覚は、いわゆる「意識」を前提しないということ。「意識されること」は知覚の必要条件ではないということ。スピノザによれば、精神は身体の観念（＝身体を対象とする）であったが、このことは、精神が身体に起きる全ての事柄を知覚していることと同義である。ということは、スピノザは「知覚」という語を従来の用法とは全く異なるものとして使用していることになる。
3. 精神は自分の身体に起こる全ての事柄を知覚しているということ。
4. 人間のみならず全ての個体は程度の差こそあれ「知覚」しているということ。全ての物体（個体）は精神（魂）を有するということ。

「知覚」とは、実体として存在する主体としての人間精神が、自分の外部に存在する対象から因果的に作用を受けたその結果として、自身の精神のうちに生じる一様態としての「観念」であるというデカルト的発想を、スピノザは放棄してしまう。自我（私）としての主観（＝自己意識）から出発して、そこからいわば世界へ脱け出す（脱自）という方向性を、スピノザは断固として受け付けない。スピノザによれば「知覚」は、無限なる自然の力（＝神）が、延長様態とは異なる思惟様態という仕方では限定されるという事態として理解されることとなる。しかも、同一の自然の力が異なる二つの仕方では表現・限定される（＝スピノザの平行論）ということは、両者の間に因果的相互作用は存在しないということを含意する。まさに同一の事実が別の仕方では「表現」されているだけであって、その表現内容の間に対応関係は認められるにしても、いわゆる因果関係を見出すことは禁じられている。この点については、例えば同一の風景が、一方では地図という仕方では表現され、他方で写真という仕方では表現されるという場合を考えてみれば分かりやすいかもしれない。両者は同一のものを別の仕方では表現してはいるが、そしてその意味においてはそれぞれ対応し合っているが、両者の間に因果的相互作用が存在するとは言えないだろう。

よりスピノザに則して考えてみるならば、「自然」は



延長様態として、すなわち物体の運動・静止の振る舞いとして説明される（表現される）と同時に、思惟様態として、すなわち精神的なものの発現として、自然科学的用語を使って言うことが許されるならば、いわば生命エネルギーの状態として説明・表現されるといってよいのかもしれない。現代風にいうならば、物理学的用語による説明と生物学的・生命論的用语（いわゆる心理学的用語も包摂する）による説明を、いわば同一の自然の異なる二つの説明様式であるかのように、スピノザは理解していたのかもしれない。もっとも現代科学においては、生物学的・生命論的用语を物理的用语に還元しようとする傾向が強いことを思えば、スピノザの平行論を唯物論的方向に解釈しようという試みが出てくるのも頷けるところである。

いずれにしても、スピノザ自身が『エチカ』第2部において、「精神は身体の観念であること」「精神は身体に起こる全ての事柄を知覚していなければならないこと」「精神は身体自身について、外的物体について、精神自身について、妥当な観念を持つことができない」と述べることによって意図したことは、独自の表象理論というべきものを明示的に提示することではなかったと考えるべきであろう。むしろ、自然における人間精神の置かれた状況を反省しなおすという文脈のもとに、人間精神の「知覚」の非妥当性が問題とされたわけであろう。人間精神も自然の共通の秩序に従うということ、その意味において人間精神の自由（意志）は認められないということ、必然的に外部によって規定されざるを得ないということ、こうした人間精神の存在論的究明が、『エチカ』第3部から5部にかけての感情の分析と人間知性の（感情に対する）力の吟味に繋がっていくのである。

## 註

1 スピノザのテキストからの引用は、ゲブハルト版全集による。SPINOZA OPERA im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften Herausgegeben von Carl Gebhardt, 4Bde, Heidelberg, 1925.

なお邦訳は、畠中尚志訳『エチカ』（岩波文庫）を利用させて頂いた。本文中『エチカ』からの引用は、特に断りがない限

- り第2部からである。したがって以下本文では、『エチカ』第2部を省略した形で表記する。
- 2 Jonathan Bennett, *A Study of Spinoza's Ethics*, Hackett, 1984, chapter. 7, section. 37. "Spinoza et l'erreur." in *STUDIA SPINOZANA*, volume 2, Central Theme: Spinoza's Epistemology, Walthers & Walter Verlag, 1986.
  - 3 Jonathan Bennett, *A Study of Spinoza's Ethics*. pp.155-156
  - 4 R. Descartes, *Sextae Responsiones*, A.T.VII, p.437.  
なお引用文中の補足は筆者によるものである。邦訳は『デカルト著作集』第2巻（白水社）を利用させて頂いた。
  - 5 Jonathan Bennett, "Spinoza et l'erreur" pp.200-201
  - 6 Margaret D. Wilson, "Object, Idea, and 'Mind': Comments on spinoza's Theory of Mind" in *The Philosophy of Baruch Spinoza*, ed. R. Kennington, The Catholic University of America Press, 1980. p.110.
  - 7 Daisie Radner, "Spinoza's Theory of Ideas" in *The Philosophical Review* 80, 1971. p.339.
  - 8 Radner, op. cit, p.346.
  - 9 Ibid., p.346.
  - 10 Edwin Curley, *Behind the Geometrical Method. A Reading of Spinoza's Ethics*, Princeton University Press, 1988.  
『スピノザ「エチカ」を読む』開龍美、福田喜一郎訳、文化書房博文社、1993、126-131頁
  - 11 Radner, op. cit, pp.341-342
  - 12 Ibid., pp.352-353
  - 13 Thomas Carson Mark, "Truth and Adequacy in Spinozistic Ideas" in *Spinoza: New Perspectives*, eds. R.W. Shahan and J.I. Biro, University of Oklahoma Press, 1978. p.22.
  - 14 Mark, op. cit, p.22.
  - 15 Radner, op. cit, pp.343-345
  - 16 Wilson は、Radner が提示するようなスピノザ表象理論の解釈は、一般に心の哲学で議論される表象の説明として、言いかえればいわゆる心身問題で議論される表象の説明として、役に立たないのではないかという批判を加えている。また、スピノザが自らの神中心主義的形而上学の体系内で、伝統的な表象概念を扱うことができると誤って考えたことに、そもそもの誤りの根があるのではないかと知っている。Wilson, op. cit, pp.111-113 筆者としては、スピノザの議論が従来の表象概念の意味内容の変更を狙っていたと解釈することで、Wilson とは異なった観点から Radner に対して批判を加えることができるのではないかと考える。

（平成14年9月9日受理）